外　国　語

1　全般的事項

問１　外国語科において、中学校の学習指導要領との関連はどのようになっているか。

中学校の外国語科の改訂の要点は、①外国語科を必修教科とし、英語を原則として履修するものとする、②実践的コミュニケーション能力の育成に重点を置く、③音声によるコミュニケーション能力の育成を一層重視する、④各学年における指導を弾力的に扱う、などである。②の実践的コミュニケーション能力の育成のためには、言語の使用場面や働きを念頭において実際的な言語の使用を重視する必要があるが、この点は高等学校の学習指導要領と共通した考え方である。また、中学校の外国語科の目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」であるが、「聞くことや話すこと」などとしているのは、特に中学校段階では音声によるコミュニケーション能力を重視していることを示している。

高等学校の外国語科において英語を履修する場合は、「オーラル・コミュニケーションⅠ」及び「英語Ⅰ」のうち、いずれかが必履修科目となるが、それぞれの内容の取扱いについて、学習指導要領の中では次のように記述されている。

• オーラル・コミュニケーションⅠ

中学校における音声によるコミュニケーション能力を重視した指導を踏まえ、話題や対話の相手を広げたコミュニケーション活動を行いながら、中学校における基礎的な学習事項を整理し、習熟を図るものとする。

• 英語Ⅰ

中学校における音声によるコミュニケーション能力を重視した指導を踏まえ、聞くこと及び話すことの活動を多く取り入れながら、読むこと及び書くことを含めた四つの領域の言語活動を総合的、有機的に関連させて指導するものとする。

ここでは、この２科目は、中学校における音声重視の指導を踏まえ、中学校から高等学校への移行をスムーズに行うという意図をもった科目でもあることを示している。

また、言語材料について、中学校の学習指導要領では「理解の段階にとどめたり表現の段階まで高めたりするなどして効果的に指導すること。」とあるが、このことは言語材料については「理解の段階」と「表現の段階」の２つのレベルを意識して適切に指導すべきことを示している。具体的には①「主語＋動詞＋whatなどで始まる節」、②「主語＋動詞＋間接目的語＋how（など）to不定詞」、③「関係代名詞」の３点については「理解の段階にとどめること」としており、より進んだ言語活動を目指そうとするあまり、生徒の学習負担を強いることのないよう配慮している。高等学校における、特に入門期の

指導においては、これらのことに十分配慮して指導計画を作成する必要がある。

問２　各科目の履修に当たって配慮すべき事項は何か。

履修に当たっては次のことに配慮することとする。

(1)　「オーラル・コミュニケーションⅠ」と「英語Ⅰ」のいずれかを必履修科目として設定する。両方を履修する場合は、一方を必履修科目とし、他方を選択科目として履修することになる。いずれの科目においても、中学校で学習した内容の一層の充実を図りながら、それぞれの科目の目標を達成することが求められている。

(2)　「オーラル・コミュニケーションⅡ」は「オーラル・コミュニケーションⅠ」を履修した後に、「英語Ⅱ」は「英語Ⅰ」を履修した後に履修することを原則とする。

(3)　「リーディング」及び「ライティング」は、原則として、「オーラル・コミュニケーションⅠ」又は「英語Ⅰ」のいずれかを履修した後に履修する。なお、「リーディング」及び「ライティング」については、「オーラル・コミュニケーションⅡ」や「英語Ⅱ」を履修する前に履修することも可能であるし、またこれらと並行して、さらに、これらを履修した後に履修することも可能である。

問３　言語活動の取扱いにおいて、配慮すべき事項は何か。

外国語科の各科目の「言語活動」には、それぞれの科目で行うべきコミュニケーション活動が示されたが、「言語活動」の冒頭の「生徒が情報や考えなどの受け手や送り手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようなコミュニケーション活動を行う」という記述は各科目共通である。この記述は、コミュニケーション活動を行う際の基本的条件を明確にしたものである。

コミュニケーションにおいては常に、言語が具体的な場面において、具体的な働きを果たすために使用される。したがって、実践的コミュニケーション能力の育成を重視する場合、言語の使用場面と働きを明確にとらえておく必要がある。このため、授業においてコミュニケーション活動を行う際の参考として、言語の使用場面と働きの例として次の項目が示された。

(1)　［言語の使用場面の例］

・個人的なコミュニケーションの場面　・グループにおけるコミュニケーションの場面

・多くの人を対象にしたコミュニケーションの場面　・創作的なコミュニケーションの場面

(2)　［言語の働きの例］

・人との関係を円滑にする　・気持ちを伝える　・情報を伝える　・考えや意図を伝える　・相手の行動を促す

生徒の実態や興味・関心に応じて、主としてこれらの各項目の中から適切なものを選択し、有機的に組み合わせて活用することが大切である。

また、コミュニケーション活動を効果的に行うために、発音、文型や文法事項、コミュニケーション方略、非言語的手段などを必要に応じて指導することが必要であるが、語彙や文型、文法事項などについての知識を増やすことや、それらをうまく操作する力を

育成することに偏ることのないよう十分留意する必要がある。

2　各科目

問１　「オーラル・コミュニケーションⅠ」、「オーラル・コミュニケーションⅡ」の目標はどのようになっているか。

現行の「オーラル・コミュニケーション」は、Aが日常的な会話を中心、Bはリスニングを中心、Cはスピーチ、ディスカッションやディベートなど人前で発表することを中心としたコミュニケーション活動の指導を行うことをねらいとしている科目であるが、「オーラル・コミュニケーションⅠ・Ⅱ」は、現行の「オーラル・コミュニケーションA・B・C」の内容を融合し、基礎的なもの、発展的なものとして履修の順序を示したものである。

(1)　「オーラル・コミュニケーションⅠ」の目標

日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

この目標は次の二つの要素から成り立っている。

①　日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うこと。

②　積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てること。

①は、実践的コミュニケーション能力を育成するという外国語科の目標を受けて、主として聞くこと及び話すことを中心としたコミュニケーション能力を養うことを科目の目標としていることを示している。

「日常生活の身近な話題」とは、家庭生活や学校生活などの身近な生活の中で、実際に、生徒同士が話すときに取り上げるような話題のことであり、生徒の興味・関心の対象となるものや、人々の関心事となっているものである。

「情報や考えなどを理解し、伝える」とは、身近な話題の中で取り上げられた内容についての情報やそれに関する相手の考えなどを理解するとともに、そのような内容について自分がもっている情報や考えなどを相手に伝えることを意味している。「伝える」とは、質問されて単にそれに答えるというやりとりだけで終わらせるのではなく、互いに情報の受け手や送り手となるような双方向のやりとりを行うことを意味している。

「基礎的な能力を養う」とあるのは、中学校での英語学習を基礎に、比較的平易な内容を学習させ、高等学校における学習の基礎を培うことをねらいとしているからである。

②は、中学校における外国語の学習で習得した英語を聞いたり、話したりする基礎的な能力を更に伸ばそうとしながら、その能力を活用して相手が話すことを理解しようと

努めたり、自分が話したいことを伝えようと努めたりすることなど、教室の内外において積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することを意味している。

(2) 「オーラル・コミュニケーションII」の目標

幅広い話題について、情報や考えなどを整理して英語で発表したり、話し合ったりする能力を伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

この目標は次の二つの要素から成り立っている。

① 幅広い話題について、情報や考えなどを整理して英語で発表したり、話し合ったりする能力を伸ばすこと。

② 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てること。

①の「幅広い話題」とは、家庭生活や学校生活の中で生徒の興味や関心の対象となる日常的で身近な話題だけでなく、例えば、自分の住む地域や日本、世界が直面する問題、芸術や文化にかかわること、あるいはマナー、モラル、価値観に関することなど、広範な話題を指している。

「情報や考えなどを整理して」とは、もともと自分がもっていた、あるいは新たに入手した情報や考えなどを自分で理解しやすいように、あるいは人に伝えやすいようにまとめたり、書き直したりすることであり、「発表したり」とは、情報や考えなどを多数の相手に広く知らせて、理解を求めることである。また、「話し合ったり」とは、考えや感情などを相互理解する段階から一歩進んで、討論などを通して、情報を共有したり、物事を決めたり、問題解決に当たったりすることを指している。

「能力を伸ばす」とは、「オーラル・コミュニケーションI」によって培われてきた発表したり話し合ったりする「基礎的な能力」を更に伸ばすことを意味している。

②は、「オーラル・コミュニケーションI」によって培われてきた英語で発表したり話し合ったりする能力を活用して、実際の討論やスピーチに積極的に参加する態度を育成することを意味している。

問2 「英語I」、「英語II」の改訂のポイントは何か。

「英語I」、「英語II」の目標は次のようになっている。

日常的な（幅広い）話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える基礎的な能力を養う（更に伸ばす）とともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

（下線部分は「英語I」、（ ）内は「英語II」）

現行の学習指導要領では、「言語活動」を「聞くこと」「話すこと」「読むこと」及び「書くこと」の四つの領域に分けて示しているのに対して、新学習指導要領では、四つの領

域を相互に有機的な関連を図ったコミュニケーション活動として示している。

「英語Ⅰ・Ⅱ」の言語活動では、生徒が情報や考えなどの受け手や送り手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようなコミュニケーション活動を行う。

ア　英語を聞いて、情報や話し手の意向などを理解したり、概要や要点をとらえたりする。

イ　英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解したり、概要や要点をとらえたりする。

ウ　聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。

エ　聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、整理して書く。

また、ア～エのコミュニケーション活動を効果的に行うために、必要に応じて、次のような指導をするよう配慮するものとする。

(ア)　リズムやイントネーションなど英語の音声的な特徴に注意しながら、発音すること。

(イ)　コミュニケーション活動に必要となる基本的な文型や文法事項などを理解し、実際に活用すること。

(ウ)　まとまりのある文章を音読したり暗唱したりして、英語の文章の流れに慣れること。

(エ)　ジェスチャーなどの非言語的手段の役割を理解し、場面や目的に応じて効果的に用いること。

言語活動を行うに当たっては、学習指導要領に示されている「言語の使用場面の例」及び「言語の働きの例」のうちから、「英語Ⅰ・Ⅱ」の目標を達成するのにふさわしい場面や働きを適宜取り上げ、有機的に組み合わせて活用する。その際、聞いたり読んだりした内容について、自分の意見をまとめ、それを発表するなど、総合的な言語活動の場面を設けるよう配慮するものとする。

問３　「オーラル・コミュニケーションⅠ」と「英語Ⅰ」の違いはどのようになっているか。

「オーラル・コミュニケーションⅠ」及び「英語Ⅰ」の内容の取扱いに、「中学校における音声によるコミュニケーション能力を重視した指導を踏まえ」とあるように、両方の科目とも、中学校における基礎的な学習事項を整理し、習熟を図りながら、多様な場面での言語使用の経験をさせることによって、外国語科の目標である「実践的コミュニケーション能力を育成すること」をねらいとしている点は共通している。

しかし、「オーラル・コミュニケーションⅠ」は、聞くこと及び話すことを重視し、情報や考えなどをまとめたり、発表したり、伝え合うなどのコミュニケーション活動の指導を重点的に行うことをねらいとした科目である。

また、「英語Ⅰ」は、基本的には、４領域を総合的、有機的に関連付けたコミュニケーション活動の指導を行う科目であるが、高等学校での指導の初期にあっては、聞くこと及び話すことの言語活動を多く取り入れ、中学校から高等学校への接続をスムーズに行い、次第に読むこと及び書くことの言語活動の比重を高めていく必要がある。また、聞いたり読んだりした内容について、自分の意見をまとめ、それを発表するなど、総合的な言語活動の場面を設けるよう配慮する必要がある。

問４　「リーディング」、「ライティング」の改訂のポイントは何か。

今回の改訂で、「積極的にコミュニケーションを図る能力の育成」については、全ての科目において目標に位置付けられたが、特に「リーディング」及び「ライティング」では、「この能力を活用して」という表現を加えることで、学習をする際に積極的に読んだり、書いたりする態度を育成すると同時に、学習で身に付けた能力をその後のコミュニケーションに積極的に生かすことを念頭においた目標としている。

「リーディング」の目標は、次の二つの要素から成り立っている。

(1)　英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解する能力を更に伸ばすこと。

(2)　この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てること。

(1)は、「オーラル・コミュニケーションⅠ」や「英語Ⅰ」で育成された能力を基礎として、情報や書き手の意向などを、書かれた場面や目的に応じて的確に読み取る能力を更に高めることをねらいとしている。

(2)は、理解が困難な時でも途中で投げ出さずに、背景的な知識や文脈から意味を推測して読もうとしたり、さらに読むことに主体的に取り組む態度を育てること。読んで理解する能力を積極的に活用して、発表や話合い活動をするなど、読むこと以外のコミュニケーションに生かしていくこと、などを意味している。

内容の取扱いにおいては、実際のコミュニケーションの場面を反映して、読んだ内容の概要を英語でまとめて口頭で伝えたり、それについて書いたり、意見を交換したりする活動など、他の領域と有機的な連携を図った活動を行うことが大切である。また、書き手が伝える情報や意向を的確に理解することや、読んだものについて感想や意見をもつこと、読むことそのものを楽しんだり、じっくり味わったりするなど、「読む目的」が適切に達成できるよう指導することも大切である。

「ライティング」の目標は、次の二つの要素から成り立っている。

(1)　情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすこと。

(2)　この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てること。

(1)は、「オーラル・コミュニケーションⅠ」や「英語Ⅰ」で育成された基礎的な能力の上に、更に幅広い話題について、多様な場面や目的に応じて英語で書いて伝える能力を伸ばすことをねらいとしている。

(2)は、情報や考えなどを整理する過程を重視するとともに、読み手の立場に立って内容や表現を工夫する態度や書くことに主体的に取り組む態度を育てること。メモをもとに会話をしたり、推敲した原稿を暗記してスピーチをするなど、ライティングの能力を活用して積極的にコミュニケーションを図る態度を育成すること、などを意味している。

内容の取扱いにおいては、英文和訳等にとどまらず、読んだ本について感想を述べるとか、商品のカタログを送ってくれるように依頼するなど、「書く目的」を重視して指導すること、また、１回書いて終わりとするのではなく、書き加えたり、書き改めたりしながら、少しずつ話題や内容を豊かにしたり、文や文章を練り、少しずつ改善していくような「書く過程」を重視した指導をすることが大切である。